

労協連だより

2005年も早2ヶ月が過ぎようとしている。月日の過ぎ去るスピードもさることながら、めまぐるしく動く時代状況の中で、「真価」が問われる場面に遭遇している実感が日に日に強まる。協同労働の「真の価値」を、組合員が実感し発信すること、また、地域や社会が具体的な「新しい姿」を求める中で、我々の発信を受け止め、協働する営みが波及する年を予感させる。

昨日、「1日だけの牛丼復活」に数多の人々が群がり、大きなニュースになった。「根強いファン健在」とともに、1日だけしか復活しない理由は、「アメリカ産牛肉へのこだわり」であることが報道されている。「アメリカ産」へこだわる理由は、効率的な部位別仕入れがシステムとして整っているとのこと。つまり「安全」「健康」より、「効率」が大事だという。こう語る牛丼屋に、何の疑問も持たず群がる我が国民たち。もはや問われているのは、「食の安全」ではない。「文化」の危機であり、「情報」の危機であり、「生命」そのものの危機である。この危機に至る経過で、我々一人ひとりは何をしてきたのか。その真摯な反省の上に立って、「どう乗り越えるのか」を、協同労働・仕事おこしの課題として捉え、発信できればと願う。

センター事業団では、各事業本部で123運動の決起集会が催され、過去最高の組合員が結集し、志高い意志統一が行動を生んでいる。これに比べると、各地域の労協は、この年度末期を123運動と位置づけられない組織が増え、結果として「協同労働」を高めたり、

古村伸宏（日本労協連・事務局長）
その実感を培う「事業拡大」が、部分的・経験主義的な傾向で停滞する傾向を、少なからず生み出している。外へ向けられている視線は、様々な公的事業の「民営化」や、介護保険制度の改革に伴う「介護予防」に向けられつつある。この焦点の見定めは間違っていない。しかし、こうした情勢をどのような理念・ビジョンを土台に、何に誰がどう挑戦するか、この具体化能力が、圧倒的に乏しく薄っぺらといわざるを得ない。これは大元の労協連合会本部の弱点である。そしてこの傾向は、挑戦を避ける傾向と、成果を挙げる責任の希薄化、そしてジリ貧の実態へとつながっていく、深刻なものである。しかし一方で、この間の若手リーダー研修や各種学習会に参加している組合員の中には、正しい前向きな方針提起や情勢分析を受け止め、歩みを始める人々も多くいることを実感している。その意味では、「情報」と「方針」が全ての組合員と、関わる全ての人々にどう届けることができるのか、が決定的になるうとしている。これも労協連合会本部に課せられている大きな課題である。

職業訓練や商店街活性化、元気高齢者づくりや障害者支援・子育て支援・若者自立支援。これらは「地域福祉事業所」の新しい段階を指し示す実践である。そしてこれは、地域福祉事業所の事業分野を圧倒的に高め、地域や生活により深く根ざす存在へと脱皮する契機でもある。その点で、前述した「食」の関わる挑戦と「農」に関わる挑戦が不可欠である。そしてこの課題には「環境」が結び

ついている。そして、「健康」「文化」という、人間存在必須の課題への挑戦と言える。各地で「コミュニティレストラン」を作り、健康レストランとして展開するだけでも、上記の課題をどう具体化するかが見えてくる。これらの具体化を働きかけ、支援し、交流する結び目の役割を果たす労協連合会でありたいと思う。そしてこれらの課題を、国の機関や自治体との新しい関係作りとして指し示していきたい。

生活と地域に深く根ざす事業展開は、組

合員一人ひとりにとっても主体的な課題である。この機会に、思い切って協同労働・仕事おこしと、組合員の生活との距離を縮め一体化することに、力を傾注したい。そしてこれこそが、個々人の発想を高め、主体性を高め、組織への結集を高める不可欠の課題である。今一度、「協同労働」とは何か、そして「労協は何を実現しようとするのか」を問い会う中で、新しい峰を築く123運動を進め、6月の広島での総会・総代会に臨みたい。

研究所たより 研究所たより

2/5にNHKスペシャルで放映した「フリーター漂流～モノ作りの現場で」という番組を観ました。現代のフリーターの、フリーでも何でもない希望のない「働かされ方」を端的に示した内容でした。

番組では、全国から集められ、派遣ではなく「請負」業者から送り込まれた20～30代の若者が、栃木県の通信機器工場で多品種少量生産の仕事量の増減に合わせて2、3日ごとに、携帯電話の組み立てなどさまざまな仕事を細切れにやらされていく様子が紹介されていました。商品の売れ行きなどが、日単位で生産を変えていくのが今の製造業の実態であり、工場の「本工」で対応できない、変動量の多い仕事をすべて「請負」に外注しているそうです。

派遣法の改正で製造現場にも労働者の派遣ができるようになったのは、最近のことですが、企業内請負(ある部門を丸ごとアウトソーシングする)にすると、さらにフレキ

シブルな、つまり労働者にとっては企業の都合に合わせた働き方が可能になるということらしいです。

まさに、労働のjust in time、これ以上ないほどの細分化です。しかも、どんな仕事でも、すべて時給900円です。番組では触れていませんでしたが、社会保険には入っていないでしょう。労働法規違反の疑いもありますが、企業側も顔や作業服のネームも含め、すべて映していましたので、もはや当たり前の世界なのですね。

結果、かなりの割合で若者は辞めていくのですが、するとまた新たに仕事のない地方(北海道とか)から人が送り込まれてきます。

見ていて、頭の中に「ドナドナ」のメロディーが鳴り響くと同時に、無茶苦茶身につまされ、そして腹が立ちました。

最近、ニート(Not in Education, Employment, or Training)という規定で、